



つくばね vol.29 no.4

目次

- 1 知的資源の基盤整備と活用
- 3 開学30周年特別企画「本学図書館所蔵の貴重書」
殿村本『水滸後伝』：識語が伝える本書の来歴
- 5 Ask Us としょかんミニガイド
- 6 開学30周年特別企画「活字と歩んだ筑波大学の30年」
筑波フォーラムのあゆみ
- 8 筑波大学図書館実務研修を終えて
- 9 本学教官寄贈著書紹介
- 10 私の一冊
- 11 掲示板
- 12 とびっくす

知的資源の基盤整備と活用

板橋 秀一

1. 電子ジャーナルの保存

20世紀を一言で表現すれば機械文明の時代といえると思うが、それに対して21世紀は情報あるいは「知」の時代になるといわれている。図書館は「知」の宝庫であるが、今後もそうあり続けることができるだろうか。現在進行している電子化をどのように進めていけばよいのであろうか。

電子化によって図書および図書館の利用形態が変化することは避けられない。図1に示すように、印刷雑誌の場合は図書館で雑誌を購入してそれを保管し、利用者が借りたり閲覧をしたりしている。それが電子ジャーナルになると、もちろん図書館が介在することはできるが、原理的には、利用者が出版社の電子ジャーナルアーカイブに直接アクセスすることが可能である。

この方式が広く行き渡ったとき、仮に出版社が倒産したような場合、電子ジャーナルのアーカイブを誰が維持・保存するのであろうか。印刷雑誌の場合は、印刷した冊子が世界中の利用者の手元にあるので、出版社が倒産してもその雑誌は図書

館や個人の手元に残り、利用できる道が残されている。しかし、電子ファイルの場合は誰かがどこかで電子ファイルを維持しないとデータを読み取ることができなくなってしまう。その点から、電子ジャーナルの場合も、やはり図書館で電子ファイルを購入して保管しておく必要があるように思

印刷雑誌			
出版社	図書館		利用者
電子ジャーナル			
出版社	(図書館)		利用者

図1 雑誌の利用形態の変化

われる。幸い、現在は冊子体の雑誌を購入しないと電子ジャーナルの契約ができないことが多いので、冊子体での保存が可能であるが、将来、冊子体なしで電子版だけのジャーナルが出版されるようになると、このような問題が生じてくることが予想される。もちろん、このような事態を避けるために種々の方策が考えられてはいるようであ

る。

一方、記録媒体についても、以前はオープンリールの磁気テープやカートリッジテープをよく見かけたが、近頃は殆ど目にすることがなくなり、最近ではハードディスク、CD-ROM、DVD等新しい媒体が次々と利用されるようになった。古い媒体に記録されたデータは、新しい媒体に移していかないと読み取ることができなくなってしまう。また、媒体が変わらないとしても、情報の記録・読み取り方式が変わった場合にはやはり似たような問題が生じる。このように、電子化データの場合は、情報の可読性を維持することが重要な問題になってくる。

2. 大量音声データの検索

最近では電子メールなしでは大学の研究・教育が殆どできないのではないかとさえ思えるほどである。特に外国との連絡の場合は電話と違って相手が不在でもよく、時差を気にせずじっくりと考えながらメールを書くことができるという点で、外国語を話すことが不得意な人にとっては便利なものである。しかし、人間同士のコミュニケーションの基本はやはり音声言語による会話である。音声自動認識と言語自動翻訳それに音声合成技術を組み合わせれば、いま電子メールにより拙い英語で行っていることが、時差と不在の問題を除けば電話で容易にできるようになる。

テレビやラジオのニュース、インタビュー、学会等の講演、学校の授業なども音声で行われている。最近公開されたNHKアーカイブスには大量の(音声付)映像データが収録されている。このように音声を録音しておけば後々利用できるわけであるが、音声のままではどこに何が入っているかが分からないので、後で利用するのが難しい。そこで、音声を自動認識して内容を文字化し、検索できるようにして利用の便宜を図ることが求められるようになった。第2次大戦中の体験のインタビューを音声認識して文字化するプロジェクトがアメリカを中心として進められており、ヨーロッパでは、過去の膨大な放送記録を音声認識によって文字化しようというプロジェクトが進められ

ている。

3. 音声情報処理とデータ

音声自動認識や音声合成の研究が進展し、その一部は実用化されるようになったが、任意の人が発声した会話音声の自動認識あるいは任意の人の声で音声合成を行うことのできるシステムの開発は今後に残された大きな課題となっている。例えばアナウンサーが原稿を読み上げているような音声なら95%程度の精度で自動認識できるが、自由に発声した音声については70%程度になってしまうのが現状である。

音声研究を進める上で音声データが必要なことは言うまでもない。その音声データは、多種多様(性別・年齢・方言・人数等)であることが求められる。最近では、各種の統計的手法の発達により、大量の音声データが音声処理システムの学習のために必要とされるようになった。従来は各研究者が、必要に応じて音声データを収録し、保管・利用していたが、より体系的なデータ収集とその効率的な利用が求められるようになった。

一方、音声情報処理システムの研究・開発を行うためには、分析・合成・認識の各種の手法を適切に比較・評価することが必要であるが、これを行う方法としては現在のところ、共通の音声データを用いてこれらの処理を行い、その結果を比較するという方法以外は知られていない。

このようなことから、共通利用可能な各種・大量の音声データを収録し、保管・公開することは研究・開発過程での利用および認識装置の性能評価の両面から求められている。このような目的に利用される音声データを一般に「音声データベース」あるいは「音声コーパス」と呼んでいる。音声情報処理の分野で「データベース」というときには、データベースシステムよりも「大量の音声データの集積」そのものを指すことが多い。そのため最近では、それを意味する「コーパス」を使うようになった。音声コーパスの必要性やその意義については近年広く認められるようになってきた。

これまで情報処理研究は情報の内容よりも容器

を対象としてきたが、最近ではコンテンツという用語がしばしば用いられるように、次第に情報の内容の扱いに目を向けるようになってきた。音声コーパスの構築は、その一つの現れと見ることもできる。

なお、上述のことは自動翻訳に代表される自然言語処理研究と言語（テキスト）コーパスや画像処理分野の研究と画像データ等についても同様に考えることができる。

4. 音声・言語データの活用

日本では(社)日本電子工業振興協会(現在、電子情報技術産業協会)、ATR音声言語通信研究所、(社)日本音響学会、文部(科学)省重点領域研究やCOEプロジェクト等によって、各種の音声・テキストコーパスあるいは電子化辞書等が構築されてきた。このように個別のデータや知識の電子化はある程度進んでいるといえる。これをさらに発展させて、大規模知識資源の構築と体系化さらにはその活用基盤を整備しようというプロジェクトが日本でも始められている。

音声・テキストコーパス等の知的資源の収集・

構築・保管・配布を行う機関として、アメリカでは90年代の初めに言語データコンソーシアムが、欧州ではヨーロッパ言語資源協会が90年代半ばに設立され、音声・自然言語処理研究に多大な貢献をしてきた。21世紀に入ってから、韓国や中国にも同様の組織ができている。一方、日本では音声コーパスの整備は比較的早く始められたが、上記のような組織の整備は遅れて、99年に予算の裏づけのないまま言語資源協会が設立され、2003年にNPOとして再発足してこれから活動を開始しようとしているところである。

このような動きは図書館とは少し違った方向を向いているように見えるが、知的基盤の整備という点では同じ方向を目指している。音声・テキストに限らず、画像・映像を含めた知的情報資源の整備とその活用基盤の構築がこれからますます重要になってくるものと思われる。図書館がそのようなものどのかかわっていくのか、考えていく必要があるのではないだろうか。

(いたばし・しゅういち 電子・情報工学系教授)

開学30周年特別企画「本学図書館所蔵の貴重書」

殿村本『水滸後伝』：識語が伝える本書の来歴

大塚 秀明

洋の東西を問わず名作は続書を生む。『水滸伝』にも数種の続書があるが、続書の常として作品の評価はあまり高くない。しかし『水滸後伝』だけは例外である。むろん『水滸伝』を越えることはないが、『水滸伝』で生き残った三十二人が遺児や二世や曾ての敵将と一緒に船で外国に渡る物語は出色である。とくにわが国では馬琴の『椿説弓張月』の素本として知られ、数ある中国の続書のうちで邦訳が2種類もあるのは『水滸後伝』だけである。そして本学の蔵本は、その馬琴と関係があるようだ。

『水滸後伝』(八巻四十回)は清初に書かれた長編小説。古宋遺民著とあり、序には明の萬曆の年号があるが仮託であり、明の滅亡(1644)後、遺民として生きた陳忱の作とされている。原刊本とい

われる英国博物院蔵本には「遺經堂蔵書」という書舗とともに清の康熙三(1664)年の刊年が記されている。原刊本はのちに「紹裕堂新刻」として重刻され、近年「古本小説集成」に華東師範大学蔵本の影印本が収められている。さらに後年には人物画像八葉を入れた有図紹裕堂刊本もある。この原刊本に対して蔡元放が改修を加えた乾隆三十五(1770)年の序を持つ刊本があり、所蔵も多数報告されている。今日広く流布しているのは改修本を排印したもので、亜東図書館本(1924)や上海古籍出版社本(1981)などがある。上述の邦訳2種とは森槐南が改修本を訳し、鳥居久靖が原刊本を訳した邦訳をいう。

写真1 二十六回二葉裏に見られる「遺経號」の三文字
逆さに押されている



遺経號の朱印

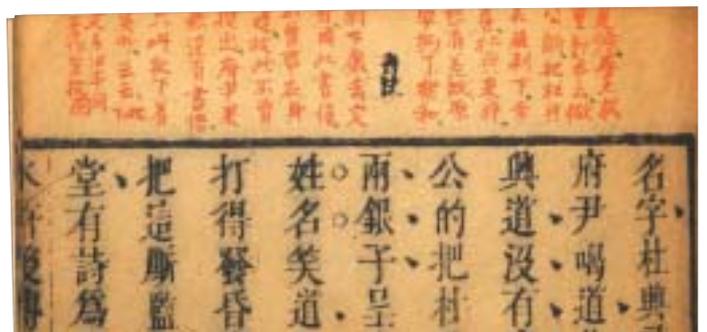
本学の『水滸後伝』は数少ない原刊本系の版で国内では本学の他に早稲田大学と東京大学の所蔵が報告されている。本学本は早稲田大学本と同系で、華東師範大学蔵本の影印本と比較すると相違点が多く、消去法で考えると本学本は遺経堂の版とも思われる。その根拠として、一つは注釈が付される場所が違うこと。本学本では“眉批”と呼ばれる欄外に注釈が施されているのに対し、華東本では欄外のほか“傍注”と呼ばれる文の傍らにあること（さらに言えば、華東本は複数の版木に依るものか、頁が換わる行に字句の重複があり誤刻が多く俗字が多数見られる）。いま一つは上図に示すように本学本には「遺経號」という印が三箇所（なぜか逆さに）押されていること。こうした印は華東本には見られない。所蔵印なら通例巻首に押し、見落としてしまいそうな場所には押さないであろう。三つ目は巻末に華東本にある「紹裕堂新刻水滸後傳八卷終」の字句が本学本にないこと。単なる書き落としかもしれないが本学本の巻末に小石元瑞が記した識語に「松坂殿邨篠斎翁新購獲之、余借覽其書多磨滅欠缺、翁因託余校補、聞山脇東海先生蔵一善本即乞借警對」とあり、その校訂ぶりからみて書き落としとは考えにくい。ただし華東本との距離があることは判っても本学本を遺経堂本と即断するには慎重にならざるを得ない。なにより小石元瑞が拠り所にした山脇翁本の所在が不明であるからだ。

馬琴の書き入れ

識語の他に下図に示すように本学本には「著作堂校閲」（あるいは「著作堂云」）の注釈が見られる。一回二箇所、四回、八回、三十三回二箇所、三十六回の七箇所ある。著作堂とは馬琴の別号、法名にも遣われている。いずれも蔡元放重訂本に言及している。先学に研究によると馬琴は享和二（1802）年に旅先で改修本を閲覽し、その時の手控えで『弓張月』を構想、後年文政十三（1830）年に改修本を入手したが、粗悪本なので友人殿村篠斎が先年文政九（1826）年に入手し小石元瑞に校訂を依頼した『水滸後伝』を借用し、異同を朱で記し翌年返却したという。馬琴の本は現在天理図書館に蔵されている。本学本は馬琴が底本とした殿村本と考えられるので、書き込まれた「著作堂」の字句が馬琴の手である可能性が大いにある。またその筆跡を現在伝わる馬琴の書簡のそれと比較すると同一のものと考えられる。

本学本『水滸後伝』は、中国文学の研究資料として、多くの補修が施されてはいるものの原刊本に近い姿を留めていること、日本文学の研究資料として、今後の調査を残してはいるものの馬琴が手にしたであろう殿村篠斎本と考えられること、貴重図書に相応しいものと思われる。

写真2 四回五葉表に見られる著作堂校閲の書き入れ



原刊本では、杜興は、孫立に託された手紙を携えて楽和を訪ねるが手紙が見つかり役人に捕らえられてしまう。改修本では、見つかることを恐れ手紙は携帯していなかったと設定が換えられている。「重訂本」と「旧本」という語を用いていることから、著作堂は原刊本を旧本と考えていたことが判る。

（おおつか・ひであき 現代語・現代文化学系助教）



ASK US としょかんミニガイド

図書館のIDとパスワードについて

電子図書館で提供するサービスを利用したり、図書館の端末で学外のWEBページの閲覧や学務システムTWINSのページにアクセスする際に、図書館の利用者IDとパスワードが必要な場合があります。

このIDとパスワードをTWINSや教育用計算機のものと同様しているケースがあるようですので、今回のAsk Usでは、このことについてご説明します。

注意 学外者の方は図書館利用証をお持ちであってもこのページにあるサービスを受けることが出来ません。ただし、図情図書館デジタルメディア部門ではその日限りのIDとパスワードを発行しますので、それを使って学外のWEBサイト閲覧時の認証を受けることは出来ます。

「図書館のIDとパスワード」とはなにか

(1) 利用者ID

みなさんがお持ちの学生証、職員証、図書館利用証を見てください。バーコードがついている筈です。ここに記載されている数字の桁数により以下ようになります。

- ・書かれている数字が12桁の場合

それがそのまま利用者IDになります。

- ・書かれている数字が13桁の場合

最初の'0'を1個除いた12桁の数字が、利用者IDになります。

(2) パスワード

初期値は'library'に設定されていますが、プライバシー保護のため、初めて使用する時には必ずパスワードを変更して下さい。半角8文字以内で、使用可能文字はアルファベット(大文字・小文字は区別されます)・数字・記号です。

パスワード変更画面

注意 「図書館のIDとパスワード」との混同が見受けられるもの。

- ・学務システムTWINSのもの。
- ・教育用計算機端末のもの。

「図書館のIDとパスワード」の入力が必要なのはどんな時か？

- (1) 貸出中の図書に予約をかけるとき
- (2) 予約・貸出状況照会をするとき

ともに次の画面で認証が求められるので、「利用者ID」と「パスワード」を入力して「認証」ボタンを押します。

〔認証〕のページ

(3) メールサービスの登録のとき

メールサービスへの登録またはサービス内容の変更をしたい時は下のページで「利用者ID」と「パスワード」を入力して「登録/変更画面へ」ボタンを押すと〔登録/変更〕画面が出てくるので、

内容を決定したら「パスワード」を入力して「登録」ボタンを押す。



〔図書館メールサービス〕のページ

(5) 学務システムTWINSへのアクセス

学内のページではありますが、TWINSのページへアクセスする際も認証が必要になります。



〔認証〕を求めるポップアップ画面

パスワードがわからなくなってしまった時は？

利用証をお持ちのうえ、各館のレファレンスデスクまたはメインカウンターへお申し出下さい。

(システム管理係)

(4) 学外のWEBサイトの閲覧等

図書館内の端末（教育用計算機端末と図情図書館のWBT端末を除く）及び利用者が持ち込んで図書館のネットワークに接続したパソコンで外部のWEBサイト閲覧時に何らかの情報をインターネットに発信しようとする時、原則として認証が求められますので「ユーザ名」には「利用者ID」、「パスワード」には「パスワード」を入力してください。

開学30周年特別企画「活字と歩んだ筑波大学の30年」

筑波フォーラムのあゆみ

井 省三

手元の資料によると、筑波フォーラムの第1号が発行されたのは1976年3月となっている。第2号は翌1977年3月に発行されている。それ以後、第37号までは、記録に間違いがなければ、同じ年月に2号が発行されたり、年1号の刊行であったりまちまちの発行ペースである。現在のような年3号の発行ペースに落ち着いたのは第38号（1994年6月）からである。私が赴任したのは1989年8月だから、初めて読んだ筑波フォーラムは第28号（1990年3月）らしい。というのは、大きな声では言えないが手元には第38号からしか残してな

い。私が編集委員に命ぜられたのは第44号（1996年6月）からであるから、筑波大学・筑波フォーラムの歴史の半分しか歩いていないことになる。それでも現役の編集委員として最長老ということでこの原稿のお鉢が回ってきたようだ。半分は資料で、半分は体験で筑波フォーラムのあゆみを語ってみよう。なお、筑波フォーラム第50号で「50号の発刊を記念して筑波フォーラムの過去・未来を考える」という大変有益で貴重な特集が組まれている。

毎年の第1回の筑波フォーラム編集委員会で

「筑波フォーラム発行要領」という資料が配布される。これは昭和53年9月25日の学長決裁によるものだ。そこには「筑波フォーラムは、本学の教育改善に必要な資料を提供するとともに、広く大学教育の改革に寄与することを目的とする。」と謳ってある。新しい編集委員は、筑波フォーラムと教育との関連にちょっぴり驚くようだ。私が編集委員長を任せられていたころ(第56~61号)に、この教育の枠を広げて研究にも関連させようという意見が出たが、学長決裁の威光が大きかったためか、教育に関連した筑波フォーラムの目的は未だに変わっていない。

筑波フォーラムの構成は、手元の第38号あたりから、「漫筆漫歩」、「の眼」(ここしばらくは卒業生の眼)、「特集」、「私の提言」、「私の講義」、「研究室だより」、「学内トピックス」、「前号を読んで」が定番となっている。この内の特集の内容が毎号の新企画となっている。しかし、第39~50号(1994年11月~1998年7月)は10回のシリーズ「大学改革」の別特集が本来の特集のほかに組まれている。また、最近の第63号からは特集が「筑波大学の将来設計」というシリーズで組まれている。「研究室だより」、「学内トピックス」が定番になっていることから、筑波フォーラムが、必ずしも、教育改善の資料提供だけを目的にしてはいないことが分かるだろう。

65号までの特集を大雑把に分類してみると、やはり教育研究関連が一番多い(25)。この内訳では学群関連が中心のようだ。しかし、大学院関連も次点くらいに頻りに特集されている(7)。大学の将来関連も多く(8)、とくに法人化を迎えるここ最近ではシリーズの特集となっている。大学の国際化関連もまた多い(7)。これらの特集は、考えによっては筑波フォーラムないしは編集委員会のマンネリズムを表しているのかも知れない。しかし、筑波大学30年というそれほど長くない歴史のなかでたびたび取り上げられているということは、いまだに解決されてない問題であり、そもそも解決困難な問題なのかも知れない。

第1~65号までの執筆者の所属をみてみよう。

50号の「筑波フォーラム執筆回数ランキング」では、社会工学系(6.2%)、教育学系(5.9%)、学生・院生(5.7%)の順になっていた。50~65号までのデータを加えると、体育科学系(6.7%)、社会工学系(5.9%)、教育学系(5.5%)となっている。飛び抜けて多いあるいは少ない学系というのもないようだ。これは編集委員の選出区分(学長推薦(1)、学群長推薦(7)、企画調査室長推薦(4))によるものであろう。執筆者の決め方は、まず編集委員会で次号の構成を検討する。定番に2人ずつの委員を担当させ、特集には3~4人の委員を充てる。特集の執筆は学群長に推薦していただくという方式がメインになっているし、定番の担当委員は自分の周りから執筆者を当たっていくので、全体として執筆者が各学系に均等に割り当てられるようになる。多彩な領域からの意見(原稿)をいただくには、編集委員の再任を避けて、なるべく色々な教員に筑波フォーラムの編集委員を体験していただくのが良い。たとえ、同様な特集が組まれようともフレッシュな編集委員とフレッシュな執筆者が問題解決に一役買ってくれるだろう。

この原稿は「活字と歩んだ筑波大学の30年」という特別企画の一端を担っている。第1号は活字(活版印刷や和文タイプに用いる字型)を使って組んだのだろうか。少なくとも私が編集委員長を担当していたころ(56~62号)は電子出版であった。いつから筑波フォーラムは活字との歩みをやめてしまったのだろうか。印刷した文字または書物という意味での活字から見れば、筑波フォーラムはいまだに活字とともに歩んでいる。しかし、57号から電子図書館情報システムに登録され、執筆者、タイトルなどから筑波フォーラムが検索できるようになっている。この電子図書館システムで検索した筑波フォーラムの情報に当たるには、一次資料の「活字」の筑波フォーラムを手にとらなければならない。ところが、筑波大学の公式ウェブページ(ホームページ)では、特集記事に限られるが、「活字」ではなくPDF形式で筑波フォーラムを読むことが出来る。特集が大学のウェブページに載るようになったのは私が編集委員

長の時代からだから、電子図書館システムに登録された第57号だと記憶している。筑波フォーラムは30年あまりの歴史の最後（最近）の部分を「電子活字」とともに歩むようになっているのである。

最後に、私の編集委員長の体験から、特集のソースについてお話したい。毎年4月初めの評議会で決定された当該年度の年次計画が企画調査室から青色の冊子「平成 年度筑波大学年次計画について」として発行されている。この中の教育の部分の年次計画を特集のテーマに使ってきた。この執行部の年次計画を教員はどのように捉えて、どのように解決、実行しようとしているのだろうかという切り口が、果たして筑波フォーラムの記事に現われたらどうか。法人化を迎えるにあたり、筑波フォーラムは中期計画の教育の部分を集集テーマに選んでいくのだろうか。筑波フォーラムの始めの号では、筑波大学のアピールという特集が組まれているように感じたが、法人化され

て初めての筑波フォーラムはどのようなスタンスでこれからを歩んでいくのだろうか。

（たかい しょうぞう 体育科学系教授）



「筑波フォーラム」第50号

「筑波フォーラム」編集：筑波フォーラム編集委員会
発行：筑波大学企画部企画調整課
中央図書館本学関係資料室に所蔵

筑波大学図書館実務研修を終えて

榊原 幸子

私は平成15年10月5日から12月19日までの約2ヶ月半の間、図書館実務研修で筑波大学にお世話になりました。最初の1ヶ月ほどを中央図書館で過ごし、その後医学図書館で研修させていただきました。

現在私は茨城県立医療大学附属図書館で閲覧に関する仕事を担当していますが、業務内容が多岐にわたっているので、実際には広く浅く仕事をしているといった現状です。従って、筑波大学の様に係ごとに仕事が専門化している中での生活は初めてなので、正直戸惑いや不安もありました。しかし、皆さんがとても丁寧に指導して下さったおかげで、そういったものはすぐに払拭されました。そして、今まで自分が携わってきた仕事だけでなく直接の担当でない仕事もさせていただいたことで、改めて自分の仕事を客観的に見つめることができたと思います。

普段私はカウンターにいる時間はごく限られていて、直接利用者と接する機会はあまりありませんが、筑波大学ではカウンターにも多く出させていただきました。そこで感じたことは、国や年齢などの違う様々な方々が図書館を利用していること、そしてそのために語学力や様々な知識が必要とされることなどです。当然ながら利用者にとっては私も筑波大学職員と変わらないため、特にレファレンスでは質問もかなり多岐にわたっていて、自分の力不足、勉強不足を痛感させられました。そこで今後は図書館についてもっと知識を身につけ、データベースなども積極的に活用していきたいと思います。筑波大学で研修を終えた今、以前はもしかすると見過ごしてしまっていたようなことも自分なりに考え、問題点を見つけることができるようになったのではないかと思います。

初めの内はまだまだ先は長いなぁなどと感じて

いた研修ですが、気が付くとあっという間に終わっていたような気がします。まだまだ教えていただきたいことが沢山あり、正直なところ、終わりの頃にはもう少し研修が長ければなぁなどと考えたりもしました。今後は研修で教えていただいたことを忘れずに日々努力を重ね、業務に励んでいきたいと思えます。本当にお世話になりました。

さて、余談になりますが、医療大学が平成7年開校のまだ新しい大学であるのに対し筑波大学には歴史と伝統があり、資料も古典的で貴重なものが多く存在しています。今回の研修中には特別展が開催されていて、実際に貴重図書を間近で拝見

する機会がありました。大変すばらしかったです。その一方で電子図書館のシステムも確立されていて、筑波大学は古いものと新しいものがとてもうまく融合されているように感じました。また筑波大学では展示会のポスターや看板なども職員の方々が作成されるそうですが、本当に感心させられました。ぜひ私もその姿勢を見習っていききたいと思えます。

(さかきばら・さちこ 茨城県立医療大学 図書館・情報課)

本学教官寄贈著書紹介

平成15年10月～12月に寄贈を受けた本学教官の著書を紹介します。

(敬称略，寄贈者五十音順，所属は平成15年度のものです。〔 〕内は配架場所と配架番号です。)

川西宏幸(歴史・人類学系)

・古代エジプトの歴史と社会/屋形禎亮編・同成社，2003〔中央 242.03-Y16〕

木下由美子(社会医学系)

・在宅看護論 第4版・医歯薬出版，2004〔医学 492.9-Ki46〕

庄司進一(臨床医学系)

・より良いインフォームド・コンセント(IC)のために/日本内科学会認定内科専門医会・日本内科学会，2003〔中央，体芸，医学 490.14-N77〕

平良和昭(数学系)

・Semigroups, boundary value problems and Markov processes. Springer, 2004 (Springer monographs in mathematics)〔中央 417.1-Ta23〕

徳田克己(社会医学系)

・道徳教育エッセンシャルズ 中学校編/水野智美〔ほか〕共編著・チャイルドセンター，2004

〔中央，体芸，医学 371.6-Mi96〕

富永昭(物理学系)

・誕生と変遷にまなぶ熱力学の基礎 内田老鶴圃，2003〔中央 426.5-To55〕

中山伸一(図書館情報学系)

・情報メディアの活用と展開・青弓社，2003(学校図書館図解・演習シリーズ：1)〔図情 017.08-G16-1〕

芳賀紀雄(文芸・言語学系)

・萬葉集における中國文學の受容・塙書房，2003〔中央 911.12-H12〕

黄順姫(社会科学系)

・W杯サッカーの熱狂と遺産：2002年日韓ワールドカップを巡って・世界思想社，2003〔中央，体芸 783.47-W65〕

守屋正彦(芸術学系)

・すぐわかる日本の仏教美術：彫刻・絵画・工芸・建築・東京美術，2003〔体芸 702.1-Mo72〕

田右子(図書館情報学系)

・アメリカ公立図書館で禁じられた図書/川崎良孝共訳・京都大学図書館情報学研究会，2003〔図情 010.1-G33〕



私の一冊

守屋 正彦

『すぐわかる日本の仏教美術』

(東京美術)

〔体芸 702.1-Mo72〕



仏教美術は難解でわからない。仏像や仏画に興味があるが基礎知識があまりない。そのような学生の声に押され、また前の著作『すぐわかる日本の絵画』を読んだ方の声にも押されて、「えい、ままよ」と本来難解である仏教思想を「置いておいて」、過去の人々が造形化した心の現れ、これを表象文化として、その時代、その時代の政治、宗教、文化と結びつけ、仏教美術を通史的に書いてしまったのである。恐らくこれまでの先学の著書を見るならば、わたしのこのような著し方は美術史の上ではタブーに近い。

木下 由美子

『在宅看護論第4版』

(医歯薬出版)

〔医学 492.9-Ki46〕

昨年の4月に医学専門学群に看護・医療科学類が設置され、そこで地域看護学を担当しています。今回ご紹介する本は、地域看護学の4分野のひとつである在宅看護論のテキストです。

看護基礎教育の課程に在宅看護論が加わった

家の中に神棚があり仏壇がある国・・・日本。除夜の鐘について、初詣。

日本の仏教美術は神と共存し続けてきた歴史と文化を知ることなのである。

さて、日本の仏教美術を表象文化と考えると、そこには！とても面白い日本人の仏教美術に対する選択があった。たとえば、インドでは阿弥陀如来の遺物はほとんどないし、中国では石窟に仏像や浄土図として制作されたが、宋代以降には遺例が見られなくなる。ところが日本では平安後期の浄土思想が鎌倉時代にも受け継がれ、「南無阿弥陀仏」は誰でも知っている。そこに日本人の死生観が関係しているのではないか。仏教美術を表象文化の研究標本と考えるならば、たいへんな標本数である。文字の情報を考慮しないでも、厳然と遺物が今に存在すること自体が彼我の国々の文化の相違を明示しているのである。

仏教美術は顕教の美術と密教の美術に分類するとわかりやすい。そのものさしを本文中で示し、仏像や絵巻、曼荼羅など、「なぜこの名作がこの時代に生まれたのか」その理由を解説したつもりである。本書によって仏教美術に興味を抱く人々が「なるほど」とうなずいていただければ、書いた本人は最高に幸せである。

(もりや まさひこ 芸術学系助教授)



1997年に出版され、今回で第4版になりました。地域で病気や障害をもちながら生活する人々とその家族を看護するために、学生みなさんにこれだけは学んで欲しいことが書かれています。

看護を専攻していない人にもお勧めなのは、地域の保健・医療・福祉サービスや介護保険のしくみ、家族が病気になった時の看護や介護の方法です。在宅での看護は、看護の素人である療養者や家族が自立した生活を送るために、どのように支援していくかがポイントになるので、専門家のための特別なプログラムではなく、一般の人が行える、安全なものです。

このテキストが4版までになり、好評なのは(すでに次回は新版の案もでています)、毎年新しいデータが挿入される(著者は休めないので大変です)、すっきり見やすく読みやすい、量を増や

さず充実している、安い(金額を抑える努力をしています)、国家試験の出題基準に対応している、ワンポイントアドバイスが役に立つなどがその理由です(読後調査の回答結果です)。

そして各領域でご活躍の26名の執筆者です。本学からは松田ひとみ先生(高齢者看護学教授)にご協力をいただいております。

地域看護学のなかでも在宅看護はめまぐるしく変化しています。新しく変化する地域の保健・医療・福祉システムのなかで、看護を考えていかなければなりません。看護・医療科学類の学生だけでなく、広くみなさまに本書を読んでいただき、ご意見、ご感想をいただけるとうれしいです。このように、ご紹介できる機会を与えていただきありがとうございます。

(きのした・ゆみこ 社会医学系教授)

掲示板

借りた図書館でなくても返却できます

利用者の皆さんからの要望に応え、2月から貸出図書も借りた図書館以外の図書館へ返却できることにしました。これは、中央、体芸、医学、図情、大塚(東京)の各図書館を行き来して貸出を受ける方が多くなったため、借りた図書館へ必ず返却する従来のルールを見直したものです。

これに伴い、返却された図書が貸し出した図書館へ戻るまでの間、この図書の検索結果には「搬送中」と表示されます。こうした図書は元の図書館に戻って「搬送中」の表示が消えてから利用できます。

ただし、元の図書館に戻るまでに日数を要します。借りた図書館に返却していただくと次の方がすぐに利用できますので、可能な限りご協力をお願いします。

なお、視聴覚資料の学内利用と、筑波キャンパス・大塚図書館間の搬送サービスで取り寄せた図

書は対象外です。こちらは従来通り借りた図書館へお返しください。

医学図書館和雑誌の保存書庫への移動について

医学図書館では、書架狭隘化に対処するため、図書館前の学生自習室を保存書庫に転用し、雑誌のバックナンバーを移動いたしました。

移動対象資料は、比較的利用頻度の少ない1980年以前の和雑誌約8,000冊です。

保存書庫は施錠されておりますが、申込みをすれば利用が可能です。

利用については、開館時間内に医学図書館メインカウンターまでお問い合わせください。

図書館情報学図書館デジタルメディア部門の利用方法変更について

平成16年4月から、図書館情報学図書館デジタルメディア部門の平日夜間・土日祝日を無人開館とします。これに伴い、利用方法を下記のとおり変更いたします。

- ・受付時間が平日9:00～17:00のみとなります。
 - * 配架資料（OPAC上の所在表示：図情プラザ）の学内利用
 - * 2階各室の利用予約・利用申込
 - * 学外の方のマルチメディアプラザ利用



とひらくす

【見学者】

国際交流基金 関西国際センター 司書日本語
研修生（韓国） 1月28日（水）

【学内会議】

第260回附属図書館運営委員会（11月）
平成17年度概算要求について、電子的資料の整備・拡充について等の審議が行われた。

第261回附属図書館運営委員会（12月）

法人化後の規則等（国立大学法人筑波大学附属図書館利用規程，同利用細則）について審議が行われた。

・無人開館時間中は学内者のみ利用できます。
マルチメディアプラザ利用希望者は、プリントメディア部門メインカウンターで入館手続きを行なってください。

以上、ご協力をお願いいたします。

（問い合わせ先：デジタルメディア部門カウンター 029-859-1200）

第262回附属図書館運営委員会（1月）

国立大学法人筑波大学附属図書館相互協力（複写・貸借）規程について審議が行われた。

平成16年度附属図書館開館スケジュールが確認された。